

# コヘレト（伝道の書）

夏季聖書講座

8月4日（日）

## 1. 旧約聖書とコヘレト

旧約聖書は三つに分類されます。

①「律法の書」：創世記、出エジプト、レビ記、民数記、申命記

②「預言書」：

前期預言書—ヨシュア記、士師記、サムエル記、列王

後期預言書—イザヤ、エレミヤ、エゼキエル、12小預言者

③「諸書」

格言—詩篇、箴言、ヨブ

五つの巻物—雅歌、ルツ、哀歌、コヘレト、エステル

その他—ダニエル、エズラ、ネヘミヤ、歴代誌

旧約最古の資料「士師記」5章の「デボラの歌」は前1150年ごろの実際の戦闘の目撃者のつくった歌である。それから年月をかけ旧約聖書は幾つかの書にまとめられていき、紀元99年のヤムニア会議で旧約聖書として形が出来上がっていった。

律法の書は紀元前1000年から紀元前500年の間に纏められ、聖典的権威をもっていた。後に預言書、最後に諸書が纏められていった。旧約聖書は数百年をかけて現在の形となった。

その聖典化（聖典結集—聖書となっていく）に対して最後まで異論があったのは「雅歌」、「コヘレト」であった。

とりわけコヘレトは「紀元前3世紀の最も異端な書」、「信仰はあったが、愛と希望が欠けていた」と言われた。旧約聖書の中で異彩をはなつ書となり、ユニークな存在となっている。

コヘレトが生きた紀元前3世紀後半は、ペルシャ王国によって庇護されたユダ

ヤ教が、アレキサンダー大王によって庇護者ペルシャ王国を滅ぼされ、ヘレニズム文明に支配下に入った。次にアレキサンダー大王の死後、エジプトのプトレマイオス朝、シリアのセレウコス朝が激しく、パレスチナの支配を巡って戦いが繰り返されていました。

「頭上に広がるぬけるような空の明るさとは全く対照的に、暗い不安の空気が人々の胸に重苦しくのしかかっていた。イスラエルの地にはどうしてこれほど苦難がつきまとうのか、われわれヘブライ民族からなぜ悩みや艱難が絶えないのか。コーヘレトは自分たちの民族の歴史をもう一度振り返りながら考えた」

(池田裕著「旧約聖書の世界」)

世は去り、世はきたる。しかし地は永遠に変らない。

日はいで、日は没し、その出た所に急ぎ行く。

風は南に吹き、また転じて、北に向かい、めぐりにめぐって、またそのめぐる所に帰る。

川はみな、海に流れ入る、しかし海は満ちることがない。川はその出てきた所にまた帰って行く。

すべての事は人をうみ疲れさせる、人はこれを言いつくすことができない。

目は見ることに飽きることがなく、耳は聞くことに満足することがない。

先にあったことは、また後にもある、先になされた事は、また後にもなされる。

日の下には新しいものはない。

(1:4-9)

## コヘレトの構造

1章-6章 すべてにおいて空である。

7章-11章8節 知恵と愚行

11章9節-12章 若者への忠告

## 2. コヘレの自画像

コヘレトを書いた人物はどんな人であったのだろうか。

「伝道者であるわたしはエルサレムで、イスラエルの王であった。」(1:12)と記している。では、イスラエルの王は誰か。

コヘレとはジャンル別にすれば「知恵文学」に属している。知恵文学者を知者と呼ばれ、彼らは民間伝承や諺の蒐集（「良き名は良き油にまさり、死ぬる日は生るる日にまさる。7:1」にあるような諺）、編集、保存の活動に従事した。宮廷で活躍した知者以上に、宮廷外に活躍した知者がいた。年老いた知者、熟練した職人、地方の教師がいた。そして多くの役割を担った。

「異国の占領下、しかもユダヤを挟むペルシア、エジプト、ギリシアの対立下の軍隊の往来などで民衆の生活は圧迫され、信仰を離れ世俗化した人々が栄える反面、敬虔（けいけん）なユダヤ教徒は不遇に苦しんでいた。義（ただ）しい信仰者をなぜ神は苦しめるのか、こうした疑念がユダヤ教徒の心を覆っていた。「ヨブ記」は、『完（まった）く正しい』ヨブが受ける苦悩をテーマとする対話詩劇である。このスケプティシズム（懐疑主義）は、『空（くう）の空、空の空、いっさいは空である』ということばに始まる『伝道の手紙』で極端に達する。ユダヤ教、キリスト教の聖書には異質とも思えるペシミズム、ニヒリズムが、民衆の心をくもうとした1人の「知恵の教師」の手でこの文書をものでしたのである」

（「聖書—ヤフー百科事典」から）

義人はなぜ苦しむか、人間の運命、生と死、苦難と苦難の意味、人生の目的な複雑な問題を彼らが得た知識によって適用させようとした。時には既成の教理、信念に挑戦していくことになった。

知恵は、すべてソロモンにいたる。それゆえに「イスラエルの王」とはソロモンであるということにきせられていき、「紀元前3世紀の最も異端な書」と言われつつも、ソロモンがきせられたゆえに旧約聖書に入っていたのも事実であることを誰も否定はできない。

しかし、ソロモン名を着せた文書はいくつもあつただろうが、なぜコヘレトだけが聖書に残ったのだろうか。

### 非ヘブライ的なもの

コヘレトには旧約聖書の中心思想からかけはなれた言葉がいくつも出てくる。コヘレトでは神（ヤーウエ）という言葉は一回だけであり、民族の歴史についても記していない。時間の観念、歴史の可燃も伝統的ではない。そして現生の満足と快樂

に対する異常までの強調がある。

## 時の見方

日はいで、日は没し、その出た所に急ぎ行く。1:5

イスラエルの一日は、日没から始まります。しかし、コヘレは順序をまったく逆にします。しかし、イスラエル以外の人からするならコヘレの方がごく自然に思えます。彼はイスラエルの特殊なものより普遍性に目をむけていくのです。

天が下のすべての事には季節があり、すべてのわざには時がある。

生るるに時があり、死ぬるに時があり、植えるに時があり、植えたものを抜くに時があり、

殺すに時があり、いやすに時があり、こわすに時があり、建てるに時があり、

泣くに時があり、笑うに時があり、悲しむに時があり、踊るに時があり、

石を投げるに時があり、石を集めるに時があり、抱くに時があり、抱くことをやめるに時があり、

捜すに時があり、失う時があり、保つに時があり、捨てるに時があり、

裂くに時があり、縫うに時があり、黙るに時があり、語るに時があり、

愛するに時があり、憎むに時があり、戦うに時があり、和らぐに時がある。(3:1-8)

時を歴史的連続としてとらえず、静的、断片的な捉え方をしている。しかし、ヘブライ人は時を静的、断片的に捉えていかない。「愛するとき」、このとき同時に「憎む時」さえも起きている複合的な時の捉え方です。

「この時と時の交差との複雑な係わり合いには、個人としての人間の歴史を生み、民族の歴史を形成する。それを個性を持った個人の歴史、個性を持った民族の歴史である。夜の帳を通して一瞥した時には、どれもみな同じにみえても、昼の日の下で見ればあきらかに違う。この世に二つと同じ歴史は存在しない。コヘレが優れた思想家であることをだれも否定しなかった。しかし、彼の思想に時々顔を見せる非ヘブライ的なものに同調できないヘブライ人も少なくなかった。」（池田裕著「旧約聖書の世界」

しかし、「天が下のすべての事には季節があり、すべてのわざには時がある。」ということに誰が反対しえようか。民族を超えて、時代を超えて、現代の私たちについても言えることではないだろうか。彼はイスラエルの特殊なものより普遍性に目をむけていくのである。

## 伝道者は言う、空の空、空の空、いっさいは空である。1:2

コヘレトの中でヤーウェ（神）に触れていないことを先に書いた。彼にとってイスラエル民族を民族たらしめているヤーウェの起こす出来事さえ、「空の空、空の空、いっさいは空である。」と言いつけるのである。それは創世記の「神が造ったすべての物を見られたところ、それは、はなはだ良かった。夕となり、また朝となった。第六日である。こうして天と地と、その万象とが完成した。1:31～2:1」とは異質な世界観でした。彼はイスラエルの特殊なものより普遍性に目をむけていくのです。

コヘレトの生きた時代も、また過去においてもイスラエル艱難と苦しみの中にあつた。なぜ私たちは苦しむのだろうか。

「わたしはまた、日の下に行われるすべてのしえたげを見た。見よ、しえたげられる者の涙を。彼らを慰める者はない。しえたげる者の手には権力がある。しかし彼らを慰める者はいない。それで、わたしはなお生きている生存者よりも、すでに死んだ死者を、さいわいな者と思った。

しかし、この両者よりもさいわいなのは、まだ生れない者で、日の下に行われる悪しきわざを見ない者である。また、わたしはすべての労苦と、すべての巧みなわざを見たが、これは人が互にねたみあつてなすものである。これもまた空であつて、風を捕えるようである。(4:1～4:4)……………彼は母の胎から出てきたように、すなわち裸で出てきたように帰って行く。彼はその労苦によって得た何物をもその手に携へ行くことができない。人は全くその来たように、また去って行かなければならない。これもまた悲しむべき悪である。風のために労する者になんの益があるか。人は一生、暗やみと、悲しみと、多くの悩みと、病と、憤りの中にある。(5:15～17)」

彼は「空であつて、風を捕えるようである。」という。そしてどんなに苦勞したとて「風のために労する者になんの益があるか。」と疑問をていし、「人は一生、暗やみと、悲しみと、多くの悩みと、病と、憤りの中にある。」と事実を語るのに留めるのである。これでは何の解決にもならないように思えるが、どこか納得するものがある。コヘレトは、はっきりした原則をもって生きよとしない。だから、「空の空、空の空、いっさいは空である。」であると見えてくるのである。

コヘレトはこのような解決方法を語ります。「人は食ひ飲みし、その労苦によって得たもので心を楽しませるより良い事はない。」あまりにも利那的な結論ではないでしょうか。しかし、誰がこれに反論できようか。

だから、「空の空、空の空、いっさいは空である。」であると語るコヘレトに何か心にひかかるものをヘブライ人だけでなく私たちも感じていた。

「色即是空」という仏教の言葉がある。「空」とは普遍性のものではないだろうか。

### 3. なぜ、コヘレトは聖書に残ったのだろうか。

「『空の空、空の空、いっさいは空である。』というコーヘレトの世界観・人世観を受け入れることにはだれもが躊躇した。しかし表面においてヘブライ的な色彩はぼけていても、他民族、多文化と対話できるコーヘレトの開かれた姿勢の方が、一見ヘブライ的なものを強調しているようで実に偏見と排他性に満ちた自己主張以外の何もでもない偏狭な民族主義者や宗教家の態度よりも、はるかにヘブライ的であるという判断に立った学者たちの良識の方が勝った。コーヘレトの書が、結局はヘブライ的精神を正しく伝える書物の集成として『旧約聖書』の一部に加えられという事実が何よりもはっきりと証明している。

紀元一世紀の末になって『旧約聖書』を最後にまとめた人々は、コーヘレトをヘブライの思想家としてぎりぎりの線上に立つものとして受け入れただけでなく、この非ヘブライ的ヘブライ人との対話をやめないことの方がよりヘブライ的であり、ヘブライ的な思想の健康を維持し続ける上で絶対的に必要であるとみなした。これからコーヘレトをヘブライの土俵の中にとどめておく断を下したヘブライの学者たちこそヘブライ的ヘブライ人であって、『旧約聖書』がその全体を通して語ろうとしているヘブライ精神も、究極的にはそこに帰するのである。

『正統派』を自任するヘブライ人にとっても、コーヘレトは決して全く他人ではなかった。コーヘレトは、すべてのヘブライ人にとってもう一人の自分であったのである。だからコーヘレトの書は、『旧約聖書』の一部に入れられたのである。それは弱気の自分であり、ヘブライ人の心に現実としていつもいる自分であった。ただ、生きるためには、民族が直面する困難を乗り越えて生きるためには、しばしばその『弱気の自分』をもうひとりの自分によって押さえなければならなかったのである。

ヘブライ人は内なるコーヘレトの存在を決して軽視しなかった。内なるコーヘレトとの対話を避けなかった。しかしヘブライ人は最終的にはその内なるコーヘレトに打ち勝たなければならないことを心に決めた民族である。少なくともヘブライ人は、内なるコーヘレトを克服することこそ、よりヘブライ的であることを知っていた民族である。」（池田裕

著「旧約聖書の世界」)

私たちが学ぶことは、非日本的なものを拒否し、会話を途絶えさせてしまう私たちの傾向がある。私たちで言えば旧約聖書を纏めた学者とまったく逆で、ヘブライ的思想と常に対話していかなければならない。

ペルシャ王国によって庇護されたユダヤ教は、アレキサンダー大王によってペルシャ王国が滅ぼされた後、ヘレニズム文化の影響を受けざるをえなくなった。今日的に言えば、グローバルな世界を生きていかななくてはならなかった。それは、自分らのアイデンティティの危機であった。そんなとき、民族主義的なものが強調されてくる。自分と異なるものと会話をしなくなり、力で抑えようとする。これも、私たちの現実でもある。ここで謳われているのは、国家主義の台頭である。宗教とは常に激動の時、国家主義へと導く危険性をもっている。私たちは昔のことと笑ってばかりではいけない。私たちはいつ民族主義的な偏狭なものとなるかもしれない。ユダヤ教が聖書聖典化で、コヘレトが聖書に入れられていく過程から学ぶことは、自分らの生き方とは異なるが、普遍的なものとして対話していく健全さを身につけたように私たちはそのようにあるべきだと教えてくれていることではないだろうか。

さらに私たちは、ヘブライ人とは異なり、私たちの内にある私たち自身の自然にある世に対する諦念間に打ち勝って、イエス・キリストの救いを信仰によって与えられるように強い祈りが私たちにあらねば、「世の光、地の塩」たりえなくなる。

#### 4. 私たちが聞くこと

牧師会で「空の空、空の空、いっさいは空である。」であるという日本人のもっとも心に響く言葉を「コヘレトは言う。なんという空しさ／なんという空しさ、すべては空しい。」と新共同訳聖書が訳したことを強く批判していた牧師がいたことを思い出す。なぜなら、「空の空、空の空、いっさいは空である。」の訳の方が心に響くからである。「色即是空」とい般若心経の言葉、「行く川のながれは絶えずして、しかも本の水にあらず。よどみに浮ぶうたかたは、かつ消えかつ結びて久しくとどまることなし。世の中にある人とすみかと、またかくの如し。」の方丈記の言葉、「祇園精舎の鐘の声 諸行無常の響きあり 沙羅双樹の花の色 盛者必衰の理をあらわす おごれる人も久しからず ただ春の夜の夢のごとし たけき者もついには滅びぬ 偏に風の前の塵に同じ」の平家物語の

言葉に通じるものがある。ある意味でコヘレトの言葉はヘブライ人よりもなお私たちの内を支配する言葉であるかもしれない。むしろヘブライ的生き方が私たちの借り物のようであるところに私たちは日本人のキリスト教信者として生きる難しさがあるのかもしれない。

聖書に親しみにくい私たちにとって、聖書に近づいていただくためにコヘレト、伝道の書は必要なものだったのである。

しかし、私たちのうちなるものを支配している日本的な精神、「空の空、空の空、いっさいは空である。」ということとも対話しつつ、「空の空、空の空、いっさいは空である。」では超えられない現実の課題があるのも事実であることに気づくべきである。

「このように、わたしたちは信仰によって義とされたのだから、わたしたちの主イエス・キリストによって神との間に平和を得ており、このキリストのお陰で、今の恵みに信仰によって導き入れられ、神の栄光にあずかる希望を誇りにしています。そればかりでなく、苦難をも誇りとします。わたしたちは知っているのです、苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生むということ。

希望はわたしたちを欺くことはありません。わたしたちに与えられた聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからです。ローマ5:1-5」とあるように一つの原則、神の救済を生きるというヘブライ的生き方、救済信仰、この救済信仰によって私たちの内なる精神に打ち勝っていくというのが私たちキリスト者自身である。

無力、儂さにたちつく人間がコヘレトには示されており、無力なるこの刹那的、絶望儂さは、ルターがいうように「隠された神」のもとにあり、ここで福音の光に照らされる時、克服されることが可能となる。「無から有」を呼び出す神を見出すことになる。

#### 参考文献

ケンブリッジ旧約聖書注解 1 1 W・J ファースト著 新教出版社

新共同訳 旧約聖書注解 II 日本キリスト教団出版局

旧約聖書の世界 池田 裕著 三省堂

LAOS講座4巻 太田一彦著 日本福音ルーテル教会

コヘレトの言葉を読もう「生きよ」と呼びかける書 小友聡著 日本キリスト教団  
出版局

すべてには時がある－旧約聖書『コヘレトの言葉』をめぐる対話

若松英輔 小友聡 NHK出版

それでも生きる 旧約聖書『コヘレトの言葉』 小友聡 NHK出版